

校長室から応援メッセージ①

令和3年5月14日（金）

「無理なく、毎日絶え間なく、続ける」（柴田まゆみ『白いページの中に』）

皆さん、こんにちは。日頃お会いすることのあまりない校長の斉木です。入学から一か月近く経過しました。山梨予備校での生活は順調でしょうか。成果がメキメキ、成績もグングンあがっている、そういう威勢のいい言葉は今は不要です。毎日タンタンと学校に通い、タンタンと授業に出席している、それで十分です。

入学式のあいさつの中で私は44年前、某予備校に入学したと申しあげました。それは1978年ですが、44年前ではなく正しくは43年前でした。間違いに気づいた私の前に44年前の高校3年生の私が現れ、今の私に向かって言いました。「私は現役で合格したかった」。次に43年前の予備校生の私が現れて言いました。「私はたまたま存在しているが、お陰で懸命に生きることを知った。お前もがんばれよ」。

私たちは自分の人生を味わうために生まれてきました。皆さんには山梨予備校に通う今の自分の生活の尊さをあらためて考えてほしいと思います。人に先んじるとか後れるとか、人との比較は全く関係ありません。私は高校の同じクラスの友達と同じ大学・学部を受験し私は不合格。友達は一年早く入学しましたが留年し、結局卒業は一緒でした。こんなにわかりやすくなくても必ずどこかで帳尻は合うものです。そもそも、その後の長い人生を考えれば、そんな帳尻はどうでもいいことではあります。

さて43年前の私はアパートの部屋と予備校を往復するだけの毎日でした。毎晩ラジオから流れる歌を聴きながら予備校のテキストに向かうのですが、部屋の侘しい空気とともにいくつかの歌が記憶に蘇ります。その中で『白いページの中に』という歌は、「いつの間にか私は、愛の行方さえも見失っていたことに気付きもしないで」という歌詞で、当時の私には全く縁のない悲しい恋の歌でした。私はのちにその歌手と同じ名前の女性と結婚したことがあります。今も私の妻です。くだらない話で失礼しました。

歌の意味に関係なく、「いつの間にか私は」とロずさみながら予備校に通い続けた私は、いつの間にか大学生となり、いつの間にか高校教員になっていました。そしてくどいですが、いつの間にか定年退職を迎えました。いつの間にかという言葉からは、人任せで、どこか懸命に生きていない感じを受けるかもしれません。

しかし「いつの間にか私は」という感覚で自分の人生を眺める、そういう時間や人生のとらえ方が私は好きです。予備校時代の私は、目の前のことしか考えないように努力していたと思います。毎日タンタンと予備校に通い、タンタンと授業に出席する。先のことを先走って考えたりせず、目の前の勉強を決して無理することなく、しかし毎日絶え間なく続ける。そんな単調な日々の連続であってこそ「いつの間にか私は」の感覚で結果として前に踏み出せていたのだと思います。

無理なく、毎日絶え間なく、続ける。そこに結果を求める気持ちが強いと、焦る気持ちが出て、やる気が空回りしてしまいます。過ぎた過去を悔やんだり、まだ来ぬ未来を案じたりするのでなく、ただひたすら今ここで自分の最善を尽くす。そんな皆さんの姿を、私は校長室から静かに応援したいと思います。